

2001.10.6

伊勢国分寺跡

第25次発掘調査現地説明会資料

鈴鹿市考古博物館

1．伊勢国分寺跡の調査について

鈴鹿市国分町字堂跡，西谷，西高木に所在する伊勢国分寺跡は，史跡名勝天然記念物法制定から間もない大正11年10月12日に国の史跡に指定されています。この史跡指定地は僧寺と考えられています。

昭和63年～平成2年の外周の調査により，築地塀に囲まれた寺の範囲(伽藍地)が確認されました。その後の調査では国分町集落の南方字南浦で国分寺に先行する白鳳寺院「南浦(大鹿)廃寺」の存在が明らかになりました。また，国分町集落周辺の調査で，僧寺とは型式の異なる奈良時代の瓦や土器を伴う溝，掘立柱塀，土坑等が検出され，尼寺は僧寺の東に並ぶように存在したとみられます。

鈴鹿市考古博物館は平成10年に開館しましたが，その建設に先立ち行われた調査では，河曲郡衛正倉院とみられる大規模な倉庫群と政庁あるいは豪族居宅らしき整然と建てられた建物群が確認されています。国分寺の建立と，郡司を務めるような在地の有力豪族との関係が浮かび上がってきました。

鈴鹿市では，考古博物館の建設と併行して史跡の全域を平成7年から3箇年で公有地化しました。今回行われている調査は，将来の史跡公園整備に先立ち伽藍(建物)配置と規模を確認するためのものです。

平成11年度の調査では，史跡の碑が建つ講堂推定地を対象として調査を行いました。その結果，講堂の基壇を確認しました。

平成12年度の調査では，さらに講堂の規模の確認が行われ，併行して行われた金堂の調査では，金堂基壇が確認されました。

2．伊勢国分寺とはどのような寺か

国分寺は，聖武天皇の命により各国に設置された国営の寺院です。僧寺「金光明四天王護国之寺」と尼寺「法華滅罪之寺」の二寺からなります。仏典の教義にもとづき国家を平安に治める鎮護国家の理念のもとに押し進められた国家的プロジェクトでした。

天平13(741)年の詔勅が「国分寺建立の詔」として知られています。しかし，すでに天武・持統天皇の時代から各国に前身的な寺院が置かれていましたし，実際の国分寺建立の出発点は文六の釈迦像の造立が命じられた天平9(737)年に遡ると考えられています。国分寺の建設には長い年月と膨大な経費がかかりましたが，それはすべて国(地方)の負担でした。中央からの様々な財政支援策や督促そして地方豪族の参画などにより，ようやく各地の国分寺が完成を見たのは聖武天皇が亡くなり一周忌が営まれた天平宝字元(757)年頃で，20年以上の年月がかかったと言われています。

伊勢国分寺についての文献は極めて限られています。宝亀 6 (775) 年の異常風雨により伊勢・尾張・美濃の国分寺並びに諸寺の塔が壊れたという記事と、大同 4 (809) 年の志摩国分二寺の僧尼を伊勢国分寺に安置したという記事の 2 件のみです。

では、これまでの調査成果から伊勢国分寺の姿を復元してみましょ。建立の詔にもあるように、国分寺は「**國の華**」たるべき荘厳な建造物で、「必ず好所を選び必ず長久たるべし」とあるように、南に平野を望む、水害の恐れが無い台地端部に立地します。付近を官道(古代東海道)が通る交通の要所にもあたります。

伊勢国分寺の**寺域(伽藍地)**の範囲は一辺 180 m (600 尺) のほぼ正方形です。周囲を**築地塀**という高い土塀で囲まれています。国分寺は南面して建てられ、南に開く**南門**が正門となります。伊勢国分寺の場合、主要伽藍の主軸が寺域の西に偏っているため、南門もこれに合わせ西偏していることは確認されていますが、規模はまだ不明です。この内部は僧と仏の空間であって一般民衆が入ることはできませんでした。東、西および北にも僧の出入りする門が存在したはずですが未確認です。

南門を入ると直ちに**中門**に行き当たります。中門は仏門であって中心となる門です。中門には**回廊**という廊下が東西に取り付き金堂(講堂の場合もある)との間を結んで金堂院を構成します。この内部は、仏の聖なる空間で僧さえみだりに立ち入ることはありませんでした。**今回の調査はこの中門と回廊の位置と規模を確認することが目的です。**

金堂は寺の中心となる仏殿です。丈六の釈迦像と挟侍菩薩 2 軀が安置されていました。昨年実施した発掘調査では、基壇を検出しその規模は東西 28 m、南北 23 m であることが確認されています。

金堂の背後には僧たちの修行生活にかかわる諸施設(僧院)があります。**講堂**は仏典の講義が行われる場所です。僧寺には 20 名の僧が置かれていましたから講堂も壮大なものでした。発掘調査では金堂の北 21 m の地点から、東西約 33 m、南北約 21 m の基壇が検出されています。

この他には僧が生活する**僧坊**、教典を収める**経蔵**、鐘を突き時を知らせる**鐘楼**が存在したはずです。僧坊についてはまだ確実ではありませんが、講堂の調査の際の知見から東西に長い長屋状の僧坊が講堂の背後に存在したとみられます。

塔は建立の詔によれば七重塔であったとされます。七重塔であれば高さは 60 m (200 尺) に達し、河曲郡のほぼ全域から望まれるランドマークであったはずです。尼寺には塔がないので、塔が発見されてようやく僧寺であることが確定できます。しかし、まだその正確な位置については分かっていません。

以上が寺院を構成する主要な伽藍ですが、近年行われた各地の国分寺跡の調査では伽藍地の周囲に寺院を運営するための様々な施設が存在していることが明らかになっています。主なものとして、寺院の事務を執る政所院^{まんどころ}、給食施設の大炊院^{おおい}、財産倉庫の正倉(倉垣)院、建築や修繕を行う修理院^{すり}、写経を行う経所、灯明の油を作る油菜所^{あぶらな}、仏に捧げる花や食用の野菜を育てる花苑や園院^{えん}、雑務に当たる人々の宿舎である賤院^{せん}など様々な施設がありました。伊勢国分寺では伽藍地の西側で大型の掘立柱建物や竪穴住居が見つっています。このような寺院運営施設の一部だったとみられます。

3. 今回の調査で明らかになったこと

中門(SB0101) 今回の調査では中門推定地から調査に着手しました。調査地点は金堂から約35m南です。平成5年に地下レーダー探査を行った際に東西方向の帯状の反応が確認されています。

調査を始めると、過去の耕作や耕地整理による削平が予想以上に進んでいました。そのため、基壇と呼ばれる建物のベースとなる土壇は全く失われ、地下の基礎地形^{きそちぎょう}の最下部がかるうじて残っている状態でした。基礎地形とは、掘込地形^{ほりこみちぎょう}とも言い、地面を一定の深さに掘り下げ新たに土を叩き締めながら埋め戻す地盤改良工事のことです。この中門の場合は主に暗黄色の粘質土で構築されていて、残存する厚さは数cm～20cm程でした。現在目にしている遺構検出面は本来の地表面から0.5m近く削られてしまっていることとなります。通常、基礎地形には性質の違う土を層状に積み上げる版築^{はんちく}の方法がとられますが、今回は確認できませんでした。

検出された基礎地形の広がりを追跡していくことによって、基壇の規模は東西が約19m、南北が約12mであることが確認されました。当然、基壇の上に据えられる礎石や礎石の抜き取り痕などは残っておらず柱の配置などは判りませんが、他の国分僧寺の例からみて5間×2間の建物(十二脚門)であってもおかしくはない規模です。

中門の前面には瓦の詰まった大きな落ち込み(SK0132)が確認されています。改修の際の廃材を埋め込んだものとみられます。混入していた須臾器^{すえき}や灰釉陶器^{かいゆう}の破片から平安時代前半頃に埋められたとみられます。

回廊(SC0102・0114)

中門の東西両端には回廊が取り付いています。回廊の基壇は、他の建物に比べて軽易で、基礎地形もごく浅いものです。そのため、ここでは地上部のみならず地下部も完全に消滅しています。しかし、回廊に沿って掘られた溝が内外ともに残っていたため、基礎部分の規模を推定することができました。

西回廊(SC0102)は、両側の溝(SD0103・0106)の間で、幅は約7.2～7.5 mでした。この間は完全に地山(基盤層)の土が表れていて、柱穴や礎石の据え付け痕などは全く残っていません。

回廊両側の溝(SD0103・0106)は、幅が2 m以上、深さも検出面から0.5 m強あり、本来は1 m近くの深さがあったと見られます。溝は基本的に上層と下層に分かれています。上層は浅く皿状の落ち込みで瓦の破片が多く堆積しており、いわゆる雨落ち溝に当たります。これに対し、下層の深い部分はほとんど瓦を含みません。回廊にこのような堀状の溝が必要とは思われませんので、これは回廊や中門の基壇の築成や改築時に土を取るために掘られ、残土や廃材を処理することで埋め戻されたものと考えています。

東回廊(SC0114)の規模を探るために、中門から東回廊外(南)溝(SD0115)を追うように東にグリッド(調査坑)を掘り進めていきました。中門の主軸から東に34 mの地点で溝SD0115がとぎれ、南北方向の溝(SD0117)と直角に交わることを確認し、ここが東回廊の南東隅(出隅)であると判断しました。そこで、周辺を拡張して、東回廊内側の隅(入隅)とみられる直角に折れる、雨落ち状の溝(SD0116)を確認しました。溝SD0116と溝SD0117の間、つまり東回廊東辺の幅は約6 mとやや狭くなっています。

回廊が、金堂に取り付くか、あるいは講堂に取り付くかを確かめるために金堂の真東にトレンチ(試掘溝)を設定しました。東西に延びる外(北)側の雨落ち溝(SD0120)により回廊北辺と、直角に折れる内側の雨落ち溝(SD0119)により入隅が検出されました。このことから回廊の南北規模は溝SD0115と溝SD0120間の距離約51 mであり、金堂に取り付くことが確実となりました。

下層遺構

各調査区のほぼ全域、中門や回廊の基壇の直下からも、国分寺に先行する時代の遺構が多数検出されました。竪穴住居9棟、掘立柱建物2棟や土坑・溝多数があります。古墳時代後期(6世紀後半)～奈良時代初頭(8世紀初頭)にかけてのものと見られます。

出土遺物

出土遺物はごく少数の土器を除けば大部分が瓦類です。軒先瓦としては伊勢国分寺タイプの^{たんべんはちようれんばもん}単弁八葉蓮華文軒丸瓦2類(A3・A4)と^{きんせいからくさもん}均整唐草文軒平瓦1類(B1)が主体をしめ、^{じゅうけんもん}重圈文軒丸瓦(A9)と^{じゅうかくもん}重廓文軒平瓦(A6)が各1点出土しています。せん(古代の^{れんが}煉瓦)は予想に反し、ごく少数しか出土しませんでした。

東トレンチ

金堂の真東に東西方向のトレンチを1本設けました。水田化のためかなり削平されていて残りは極めて悪いのですが、雨落ち溝風の瓦溜まりが2カ所確認されました。付近に何らかの建物が存在した可能性が高そうです。

4. まとめ

今回の調査の知見をまとめると以下ようになります。

新たに中門と回廊の位置と規模を確認しました。

中門基壇の基礎地形の規模は南北12 m × 東西19 mです。

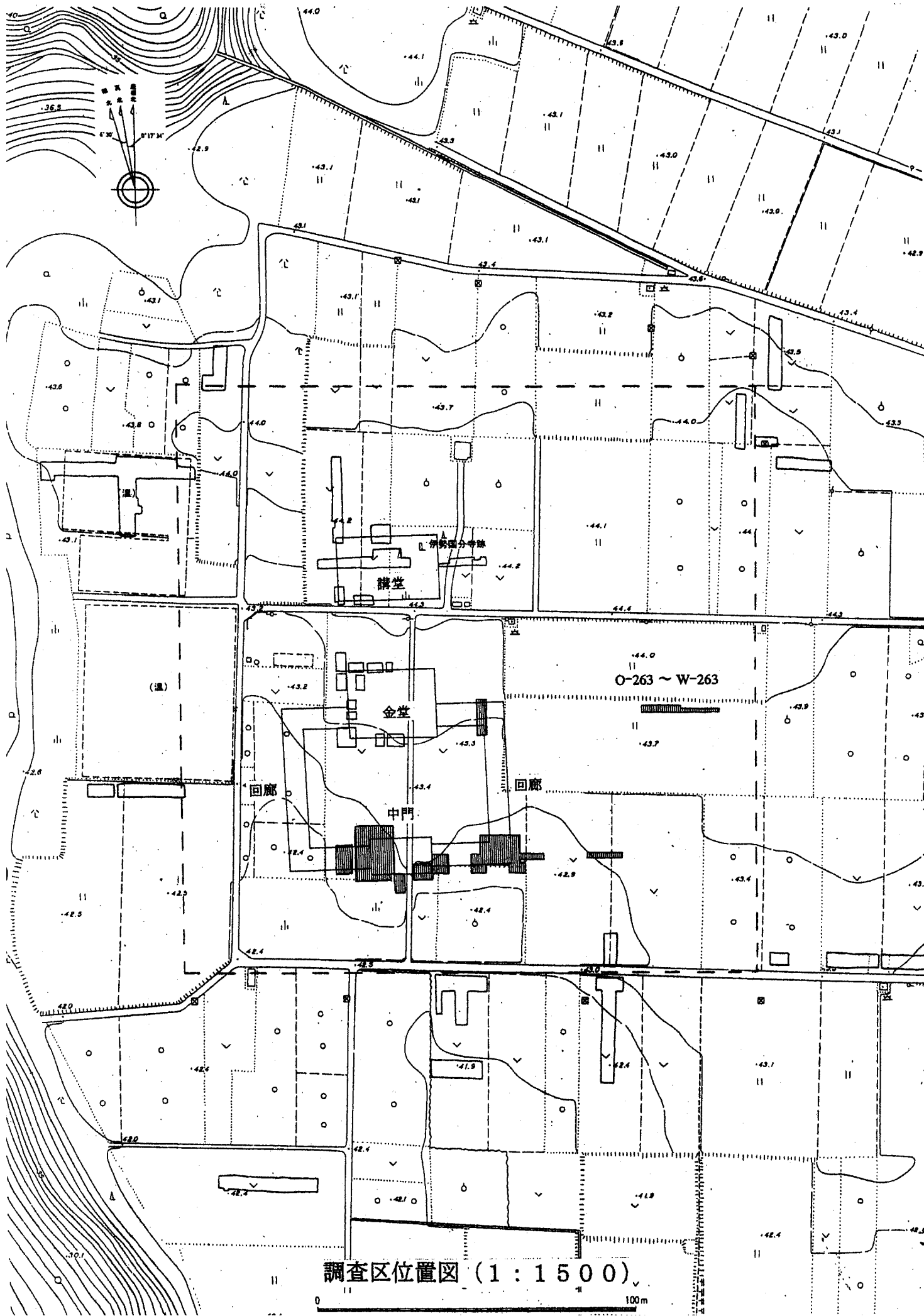
回廊は中門と金堂を結ぶタイプで、規模は東西68 m × 南北51 mです。

金堂基壇の中心から、中門基壇の南辺および講堂基壇北辺までの距離は等しく54 m (180尺)で1:1の関係にあります。設計の基本的な区割りがここから読みとれそうです。

講堂・金堂・中門基壇を貫く中軸線は座標北から西に1.5°振れています。

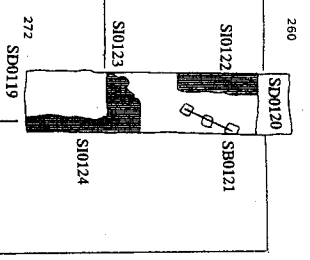
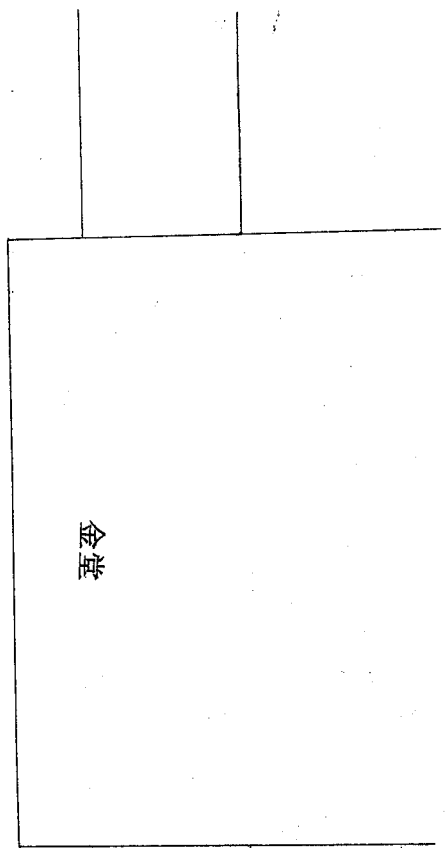
塔を除く主要な伽藍の配置が明らかになったため、他の国分僧寺との比較検討が容易となり、ようやく研究のスタートラインにつくことができました。手始めに平面図を重ね合わせると、遠江国分僧寺とあとうみや陸奥国分僧寺むつなどと配置や規模がよく似ていることが分かります。

課題として残されている塔については、伽藍配置の類似性と瓦の散布状況から、金堂の東に塔院が存在する陸奥国分僧寺タイプである可能性が高いように思われます。推定地点のトレンチ調査では、雨落ち状の瓦溜まりが確認され、何らかの建物が存在することが確実なようです。いよいよ、次回の調査で決着がつくことでしょう。

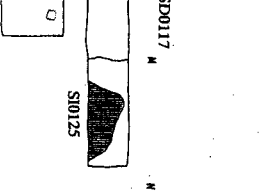
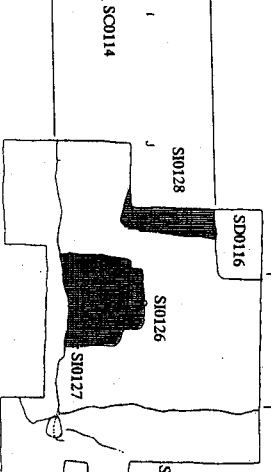
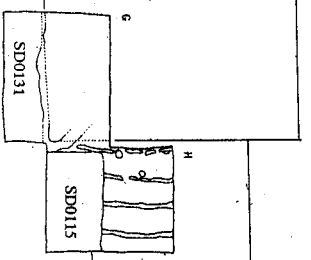
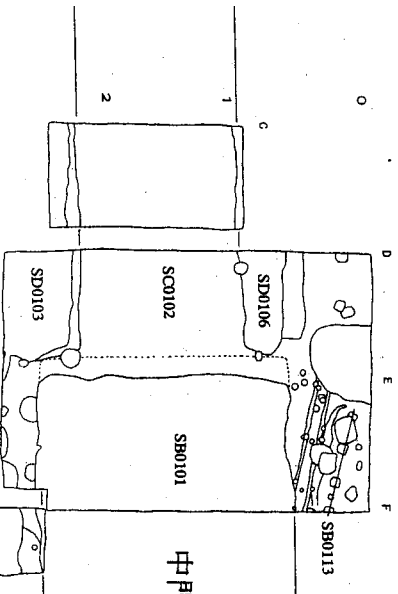


調査区位置図 (1:1500)

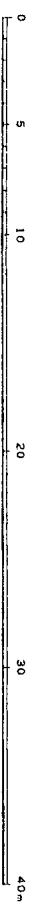
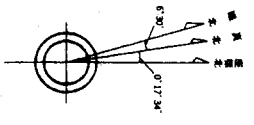
100m



回廊



- SB . . . 建物
 - SC . . . 回廊
 - SD . . . 溝
 - SI . . . 竪穴住居
- トーン部分は竪穴住居

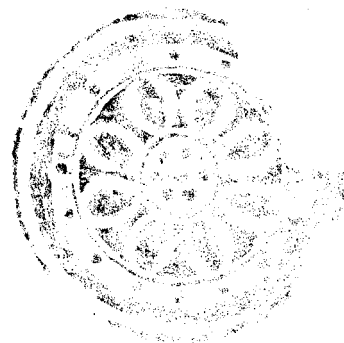


調査区遺構平面図

出土軒瓦



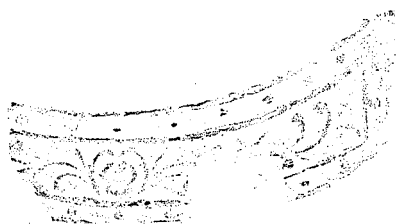
軒丸瓦 II A3型式



軒丸瓦 II A4型式



軒丸瓦 I A9型式



軒平瓦 II B1型式



軒平瓦 I A6型式

〒513-0013
鈴鹿市国分町224
鈴鹿市考古博物館
TEL0593-74-1994